



今、生き生きと **農業 馬場 翔大** (ばば しょうた) さん

近年、町内の農家が若返り始めています。今年も4人が新規就農しました。馬場さんは農業後継者として就農した3人のうちの一人。春から米作りをひと通り経験し、自信もつきました。「一年を通して初めてやったけれど、広さがあるから限られた時間の中で作業をこなすのは大変。こういう米を作りたい、とかいうのはもうすこし先かな」と実感しながら、真剣に米作りに向き合い始めています。

「去年は豊作だったけれど、今年は平年並みより少し悪い程度かな」。稲刈り、出荷作業を終え今年の農期も一段落。

「去年の稲刈りは9月10日に始めて10月7日に終わったんだ。今年は9月21日に刈り始めて10月15日が最終日。遅く始めて遅く終わった」と収穫期の天候不順で作業が遅れてしまいました。

「去年は父さんと二人の作業だった。父さんが刈って、俺が運んだんだけど、今年は一人で刈り取った分、時間もかかった」。肝心の収量は「去年は3反(30ア)の田んぼなら、コンバインいっぱい1回3杯分の米を刈り入れたんだけど、今年はコンバインいっぱい2・7杯分くらいかな」という感触だったそう。それでも終わってみれば5パーセント程度の減収にとどまったようです。

「一人で刈ったところは一日に田んぼ5枚がやつと。二人なら一日で8枚か9枚出来る。今年は育苗ハウスの管理もばあちゃんがやってくれたし、ばあちゃんと二人だったからできたけれど…。一人では厳しい」。



◇ 先輩農家の篠原猛志さん(左)、同年代の梶原宏弥さん(右)と農家の融雪剤散布代行作業(今年3月)

昨年8月、自動車ディーラー勤めから一転、農業後継者として経営を引き継ぐことに。きつかけは父親、伸二さんがJAひがしかわの専務理事として常勤役員になり農作業に専念できなくなったこと。

「急にそんな話が出て…」と唐突な世代交代だったよう。「会社員を続けていても…とは思っていたから、その日のうちに『分かった』と返事したけれどね」。『いつかは継ごうかな』と思っていた就農は、ずいぶんと早まったようです。

防除機(ビークル)の洗浄、あぜの草刈り、そして初めての米収穫作業。今年、米づくりの中心



祖母、ちや子さん(89)が収穫作業の手伝い。孫の背を押してくれる。



馬場 翔大さん(23) 30区
 (株)丸馬農場代表取締役社長。道立旭川工業高校卒業。引き続き旭川高等技術専門学院で自動車整備技術を学び、旭川市内の自動車ディーラー勤務。昨年、父伸二さん(57)を継いで農業後継者4代目として就農。同時に経営形態を株式会社に変更して代表に。水稲31畝、畑1畝を経営する水田農家。

的な担い手に。「今はやるしかないという感じかな」とはいうものの、父の目から見るとまだまだのよう。「生産管理、生産計画、資金計画も覚えて一人前さ。10年かかる」。一緒に春の融雪剤散布の代行を請け負っている先輩農家の篠原猛志さん(44)からは「ほかの人の作業を見て覚えろ」とアドバイスも受けているとか。「直播とかライスミルクとかの話もちょっと聞きたい」と新しい可能性も考え始めています。